



全国棚田(千枚田)連絡協議会

棚田ライステラス

第56号 2010.12.25

(年3回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるきゃらネットワーク

〒184-0004 東京都小金井市本町6-5-3チーム石塀内

TEL:042-386-8355 / FAX:042-385-1180

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>



「農の理想郷づくり～棚田を活かす～」

～第16回全国棚田サミット基調講演より～

静岡県知事 川勝 平太

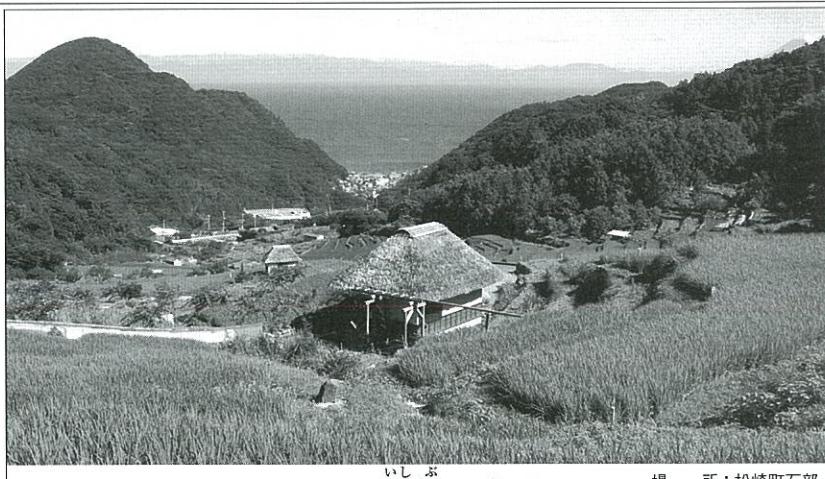


Message

私は、ふじのくに静岡県における最も美しい「むら」が、この松崎町石部「赤根田村百笑の里」であると思っています。ここで全国から棚田の保存、発展に力を尽くされている方々をお迎えするのは、本当に大切なことであり、我々にとつても励みです。石部の棚田は、平成11年から再興の運動を始め、単に松崎町、静岡県のみならず、全国の財産となりました。唯に景観が美しいとか、千枚田の一つであるというのではなく、地域の人々の心と、手が加わり、歴史をしっかりと刻み、未来志向であるからこそ美しいのです。

開国後、外国人が日本の農村景観を見て、ガーデンアーランズと形容し、その美しさに脱帽しました。日本人が欧米を力の文明と見たとき、欧米人は日本を美の文明と見たのです。これを残すことが日本を残すことになります。農業は、食糧を供給するだけではなく、文化伝統、技術を継承しています。水を保全し、景観を形成します。それは詩に詠われ、外国人も賛美しています。そして農村は、そこには生きている人だけのものでは

なく、日本の財産、日本の宝です。日本の里山は、最も豊かな景観を持つますが、その最も典型的なものが棚田です。棚田は、普通では到底稲など出来ないところに石を積み上げ、水を



「静岡県棚田等十選」

いしふの棚田

場所: 松崎町石部
栽培作物: 水稻、桜葉

駿河湾と富士山、南アルプスを望む良好な景観の棚田。「石部地区棚田保全推進委員」を中心に、棚田オーナー制度による都市住民との交流や、企業や学校など多様な主体による保全活動が行われている。

19世紀、20世紀は、力の文明、軍事力、経済力だけがものを言いい、多くの自然を破壊してきました。21世紀はこれを終えなくなりません。東京のようなコンクリートジャングルも素晴らしいですが、それを超えるものが里山にはあります。人間が帰るべき古里、住んで良し、訪れて良し、産んで育てて良し、学んで働いて良しの理想郷があります。ポスト東京時代を開くのは、こういう棚田の連携、里山の連携です。

今、農業を大好きなギヤル、かわいい長靴、手袋をした農ガールがいます。これから農業は、ハイカラ、おしゃれになるでしょう。その為には、外を見る、相手を知ることによつて自分を見出す事が必要です。

これから静岡県としても、この運動を石部の人達、また本県の棚田地域で尽力される方々と共に日本全国の国民運動にしていきたい。官民一体、地域も一緒となつて、美しい日本を作つてまいりたいと思つて

溜め、一所懸命米作りをしてきた技術、文化の結晶したところであり、大事にしなくてはなりません。そこで物を大切に

するという心も生まれてくるでしょう。

た本県の棚田地域で尽力されている方々と共に日本全国の国民運動にしていきたい。官民一体、地域も一緒となつて、美しい日本を作つてまいりたいと思つて



第16回全国棚田(千枚田)サミット

静岡県松崎町で2010年10月22、23日開催!



第1日目

- 全国棚田(千枚田)連絡協議会理事会・総会
- 開会式
- 基調講演 演題:「農の理想郷づくり～棚田を活かす～」 静岡県知事 川勝平太氏
- 事例発表 石部地区棚田保全推進委員会
- 分科会 ○第1分科会 棚田が甦る、ムラが輝く～人の輪が未来を築く～
- 第2分科会 棚田が支える、地域の自然・暮らし～里山の宝探し～
- 第3分科会 棚田は学びの場～みて・きいて・さわって～
- 第4分科会 棚田を活かす、地域のネットワークづくり～魅力ある田舎をデザインする～
- 首長会議 戸別所得補償と第3期中山間地域等直接支払制度の評価と課題

●全体交流会

第2日目

- 棚田見学会 石部の棚田
- 分科会のまとめ
- 閉会式

新しい時代の結いを築く 山本

実行委員会から

サミット実行委員会事務局
松崎町企画観光課

「棚田が結ぶ、ふるさとの絆～みんなで創ろう!百笑の里～」をメインテーマに掲げた第16回全国棚田(千枚田)サミットが、10月22日・23日の2日間、静岡県松崎町で開催され、全国35都道府県から2日間延べ2200人余の参加をいたしました。

開会式には篠原孝農林水産副大臣はじめ多くの皆様にご臨席いただき、川勝平太静岡県知事の基調講演では、松崎高等学校体育館の床が抜けんばかりの盛況さでした。メイン会場周辺に会場をコンパクトにまとめ、「棚田保全・協働」、「多面的機能・生態系保全」、「教育連携」などをテーマにした4つの分科会は、県内外で活躍する話題提供者が取組事例を報告し、活発な議論が交わされました。また、その後700人余が参加した交流会では、郷土料理や松崎ブランド品、郷土芸能などのおもてなしで、参加者は情報交換や交流を深めました。

翌日の棚田見学会では、天候に恵まれ、「駿河湾を眼下に富士山・南アルプスを眺望できる石部の棚田」の言葉通り、富士山と棚田をご覧いただくことができ、安堵しました。

今回のサミットは、人口8000人の静岡県で一番小さな町での開催であり、全国各地からの多くの皆様を迎えるに当

たり、会場や交通など心配な面もありましたが、松崎らしい、心に残るサミットにしたいと準備を進めてきました。小中学生、女性会OGなどの皆さん的手作りの記念品をはじめ、保育園の演奏、松崎小学校2年生の「棚田へ行こう!」齊唱、女性会の皆さんのがんの郷土料理のおもてなし、高校生・ボランティアによる受付・案内・誘導・ガイドなど町内外の個人、企業、各種団体、子どもから大人まで一致団結して、全国各地の皆様をお迎えすることができ、正に今回のサミットがテーマとして掲げた、結いの精神、ふるさとの絆が結集された大会が開催できたことを嬉しく思います。

今回のサミットを通じ、石部の棚田の新たなスタートとするため、提言・提案された意見を活かすとともに、サミット開催で芽生えた協働体制により棚田を「郷土の宝」「日本の宝」として持続的に保全し、地域活性化を推進していくたいと思います。

終わりにサミット開催に当たり、前年度開催地である新潟県十日町市をはじめ多くの皆様のご支援、ご協力をいただきましたことに対しまして厚く御礼申し上げます。また2011年、「しつきゅうと彩の里」徳島県上勝町でお会いします。

棚田が甦る、ムラが輝く～人の輪が未来を築く～

○コーディネーター

杉山 恵一（静岡大学名誉教授）

○話題提供者

1. 高橋 周蔵（石部地区棚田保全推進委員会会長）
2. 山本 哲（NPO法人せんがまち棚田俱楽部理事長）
3. 高木 伸（富士常葉大学環境防災学部教授）
4. 田口 譲（NPO法人恵那市坂折棚田保存会理事長）



分科会報告

1日目に、静岡県川勝平太知事による基調講演、石部の棚田保全の事例発表の後、各会場にわかれ4分科会が開催された。どの分科会会場にも人があふれ、さまざまな地域の事例等が語られ、質問が飛び交った2時間となつた。各コーディネーターの先生方からご報告いただいた。



棚田の運営に、いまや若手の外部支援者が欠かせない

コーディネーター…杉山 恵一

第1分科会のテーマは「棚田が蘇る、ムラが輝く～人の輪が未来を築く～」であったが、実際には「棚田の運営とその問題点」に絞って発表を行い討議を行つた。パネリストは静岡県から石部地区棚田保全推進委員会会長 高橋周蔵氏、NPO法人せんがまち棚田俱楽部理事長 山本哲氏、富士常葉大学教授 高木伸氏。県外からはNPO法人恵那市坂折棚田保存会理事長 田口譲氏の4人が出席された。紹介された棚田はすべてオーナー制を実行しつつあるところ点で共通である。

高橋氏は全体会で石部の棚田について詳しく述べられていて、ここでは主に問題点として現地スタッフの老齢化、外部からの支援のあり方などを話題とされた。棚田の運営にはコンタクターとしての現地農業者とエネルギーとしての外部支援者、とりわけ若い世代の参加が欠かせないのである。

山本氏は静岡県中部の菊川町倉沢地区での棚田再生事業の経緯と現状について述べられたが、特色として、地域の学校、作りだけではなく伝統的な年中行事の復活などが印象に残つた。

田口氏の関わる恵那市の棚田は14haという広大なもので、それだけに運営組織の充実が際だつて感じられた。

とりわけさまざまな土地利用形態によるゾーニングが行われていることも注目された。またここでも農業に関わる伝統行事や手法の掘り起しが熱心に行われているようで、とりわけ「石積み塾」が恒常的に行われ、戦国時代から築城などで活躍が知られている黒鍬衆の石積み術の復活・継承がなされていることであつた。

高木氏は勤務する富士常葉大学の環境防災学部の学生およそ50名を引き連れて、毎年石部の棚田の支援をつづけて来られた。とりわけ、あまりオーナー達のやりたがらない畠塗り、草取りなどをを行うと

いうことで、なくてはならない戦力であったが、今年で補助金が大幅に削減されることで、その存続が危ぶまれるといつことであった。この分科会に出席していいた3名の富士常葉大学の学生が登壇して、農業体験によって大いに啓発され、将来、生活が成り立つなら農業に従事してもいいという発言を行つて喝采を浴びた（写真左）。

下右。

ディスカッションでは、いくつかの質疑応答がなされたあとで、やはり現地スタッフの高齢化の問題が話題とされた。

問題の解決にはやる気のある若者の支援体制、とりわけ経済的な支援が欠かせないということで、現地での努力に加えて行政の支援体制づくりが急務とされる事が結論づけられた。それに関連して、最近富士常葉大学を卒業して現地に移住し、現地で良き伴侶と結ばれ、最近出産した芝村知子さんがその長男風太君を抱いて前に立ち、若者の現地移住の生きたサンプルとして大きな拍手を浴びた（写真左）。



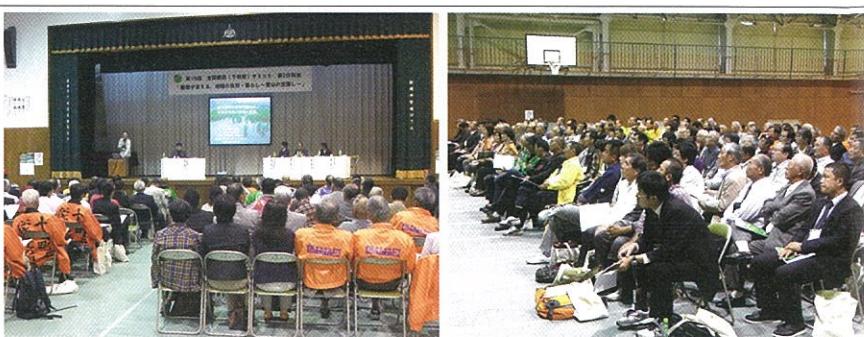
棚田が支える、地域の自然・暮らし～里山の宝探し～

○コーディネーター

山田 辰美（富士常葉大学 社会環境学部教授）

○話題提供者

1. 土屋 武彦（下田市立下田中学校教諭）
2. 稲垣 栄洋（静岡県農林研究所上席研究員）
3. 福井 順治（磐田市桶ヶ谷沼ビジターセンター所長）
4. 日鷹 一雅（愛媛大学農学部准教授）



身近な自然の中で棚田は生物多様性のホットスポットとして価値の高いものである。今回のサミットと同時に開催されていた生物多様性条約締約国会議で、環境省は人間の福利と生物多様性の両方を高める里山的な土地利用システムを、「SATOYAMAイニシアティブ」と銘打って提案している。當農することによって自然の豊かな恵みを引き出すといふ人間と環境の持続可能な関係を、改めて構築しようと言つてゐる。棚田は正に里山利用の中核を成してゐる。

まず、稻垣栄洋氏から静岡県内の棚田を紹介していただき、棚田毎に多様な個性を持つていてこと、特に農地の周辺に展開する採草地など草地の豊かさについて語られた。草花の美しさで里山は季節感豊かに彩られていることが印象的だった。

トンボ生息地として知られる桶ヶ谷沼の保護活動に従事されてきた福井順治氏は、赤とんぼをはじめとするトンボ類の多くは農業などの人手によって維持されて來たものであるといふ。アキアカネなどの赤とんぼが全国的に（静岡県では30分の1）減少している原因が、新しい殺虫剤や稻品種の早生化・単一化などに伴つ農業手法の変化にあると問題提起された。

次に中学生を巻き込んで地元松崎町の

棚田が支える自然――人が米づくりをしていくの生物多様性

コーディネーター・山田辰美

ホタルの保全活動されてきた土屋武彦氏は、先人の残した棚田が台風などの自然擾乱に強いこと、ホタルを守る活動が子どもたちの愛郷心や自立を促すことを実際のエピソードを交えて話された。

名古屋のCOP10から駆けつけた日鷹一雅氏は、タガメなどを例に挙げて農地の持つ多様な水辺環境が生物の多様性を保証していると指摘した。

このような議論から生物の多様性を生み出すシステムとして棚田が抱え持つ環境の重要性が再評価された。まず山にある棚田を維持するために、周辺の森の存在は安定した水を供給する水源林として不可欠であり、さらに長年、薪炭林としてよく活用された森自体が、落葉広葉樹を中心とした明るく動植物に富んだ環境である。山裾の草地や畦にはそれぞれ異なる可憐な草花が咲き、春早く森から出てきたヤマアカガエル、ヒキガエルなどのカエル類は田面の水たまりで繁殖する。子どものカエルは田んぼや草地で小さな虫を食つて育ち、やがて森に入つて行く。石部の棚田では周囲が深い森に囲まれ、勾配が大きくしぶきの立つ清流があることなどから、マユタテアカネやミヤマアカネが優先している。大きな沢を中心におニヤンマやカワトンボ類が見られる。周囲の緑地と多様な水辺が多様な生物たちを生み出している。ヤマアカシなどの

ヘビ類、サシバなどの猛禽類なども見られ、豊かな生態系が形成されている。

棚田環境が生物多様性の重要な生息地であるホットスポットであり続けるために、どんな配慮や工夫があるのかに議論は及んだ。棚田が平野部の水辺から隔離されていることで、アメリカザリガニやジャパンボターシなどの外来種の侵入を阻み、里地生物の聖域となっている。水源林や草地などの緑地と水路などの水辺の多様性を維持するために、積極的に人の手を入れるべきであること。さらに活発な稻作りの活動こそが、重要なことを確認し合った。



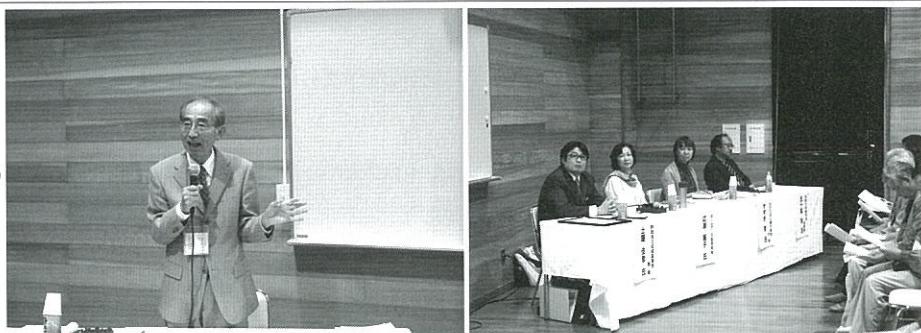
棚田は学びの場 ~みて、きいて、さわって~

○コーディネーター

中井 弘和 (静岡大学名誉教授)

○話題提供者

1. 土屋 佳彦 (静岡県立松崎高等学校教諭)
2. 広瀬 麗子 (ホールアース自然学校)
3. すずき 青 (NPO法人縄文楽校代表)
4. 五十嵐 勉 (佐賀大学農学部准教授)



棚田は人々が互いに助け合い、生命力を高め合つて生きる」とを学ぶ最高の場

人がいのちを高めて生きる基盤が、観る、聴く、触るにあるとは確かだろ。棚田は、人が原初的に持つているこれら之力を養い、よりよく生きるために学びの場になるのか。それを証して、社会に発信していくのがこの分科会の役割であろう。高校や大学において、あるいは民間で学校を設立して、棚田を教育の場として長く活躍してきた4人のパネリストが、それぞれの現場から固有の新鮮な空気を伝えながら、語り合った。

地元松崎高校の教員である土屋佳彦氏は、地域に貢献する人材の育成を目指したプログラム「西豆学」の石部棚田での体験学習について報告した。棚田における稻刈りなどの作業体験や先達農家の話を聞くことを通じて、生徒たちが地域を理解し、愛する心を養っているという手ごたえを感じている。そのような生徒たちの心を伝える音声が会場にも流れ、若者の心身を養う棚田での学習効果が実感された。

広瀬麗子氏は、地域に根ざした循環型農業を実現し、田舎(自然)の良さを伝えたいと設立した「ホールアース自然学校」の活動の様子を、田んぼで活き活きと遊び働く子供たちの表情とともに報告した。豊かな自然の中では、子供たちは互いに助け合いながら「育む合つ」という真の学びが実現するという。自らのち

を育て、食べるという体験から子供たちはいのちのつながりを実感し、おのずから「いただきます」が口をついて出るようになる。

すずき青氏は、森林破壊の現実に直面したことを見機に、循環型社会の大切さを痛感して「縄文樂校」を設立した。そこで、森からしみ出る湧水を生かした田んぼ・稻づくりから見えてきた、周囲の自然や人々の心の蘇りの様子を報告した。森から里山(棚田)、川、海へと繋がるいのちの流れがその小さな田んぼの経験から身体で感じ取れると語る。いのちを重視し、人間の心の成長に合わせた社会の形成の大切さを訴えた。

佐賀大学の教員である五十嵐勉氏は、大学と地域の協働による地元の蕨野棚田保全の多彩かつユニークな活動状況を報告した。大学の教育にあっても、その活動は地域依存ではなく、自主的に責任を持つて行うべきことを強調した。在来種の保存や有機農業の確立など、棚田が未来に向かう農業推進の拠点となつている。棚田保全の第三の道として、「文化遺産」を目指しながら、地元負担が軽減されるような「自立型オーナー制度」を探つてい

る。

以上のように、各パネリストのそれぞれの現場から、棚田は、いのちが循環する場であり、そこで人々は確かないのち

を体感し、生きる力を養うことのできる学びの場であることが証しされ、確認された。日本の自殺多発の現状を見るまでもなく、孤立感を深める社会にあって、あることをじつそ強く社会に発信していく必要があると結論された。

コーディネーター・中井弘和



棚田を活かす、地域のネットワークづくり～魅力ある田舎をデザインする～

○コーディネーター

千賀裕太郎（東京農工大学大学院連合農学研究科長）



○話題提供者：

1. 鈴木 基（松崎町商工会事務局長）
2. 大棟鉄雄（NPO法人フロンティア清沢理事長）
3. 毛利良之（NPO夢中塾副理事長）
4. 西谷吉雄（株式会社いろどり取締役）



千 第四

まず、4人のパネラーから概略次のような興味深い報告をいただいた。

1. 棚田米で焼酎「百笑一喜」の開発
（静岡県松崎町商工会 鈴木基事務局長）

町内の観光客の減少を課題としたこの事業は、本来ならば観光協会が取り組むべきことだが、中小企業者向け補助事業へのアクセスを多く持つ商工会が、新たな観光資源としての「棚田」に着目して、「農商工連携」に取り組んだ。主な成果は棚田米（黒米、赤米）による「焼酎百笑一喜」の開発で、地元の富士錦酒造が2年かけて商品開発した。清酒ではなく焼酎にした理由は、販売が軌道に乗るまでに時間がかかるが、その間、日々持ちのする焼酎のほうがリスクが少ないと判断したため。初の平成18年度9000本、平成20年度15000本と順調に伸びた。

本商品は、まさに「協働の産物」だった。商工会が農業者と製造販売業者とのコーディネートや、商品開発、瓶などのレッテルのデザイン、PR用グラスの製造などの販売促進など、国や県などからの補助金の獲得を含めて、地域の各種事業者、デザイン専門家などの協働をしっかりと組織して成功に導いた。

2. 地域資源を活かした収益事業と過疎問題解決

（NPO法人フロンティア清沢、大棟鉄雄理事長）

過疎・老齢化、農林地の荒廃を食止めようと、心ある地域住民が昭和58年から準備して平成15年に「NPO法人フロンティア清沢」を旧清沢村（静岡県静岡市）の会員160人で立ち上げた。NPO法人としたのは、補助金の受け入れ母体にもなれると期待したからである。活動予算は年4600万円にのぼる。平成16年から「ふるさと交流施設『まよざわらの駅』」の運営母体となり、以後、地域資源を活かした収益事業（豚肉料理などの農林產品の販売や都市農村交流事業）に加えて、過疎問題解決事業（有償運送やまよび巡回バス停までの送迎事業子育て支援事業）、棚田保全事業（耕作放棄地再生など）、地元の切実なニーズを捉えた地域支援事業を開拓して、地域の住民に喜ばれている。

3. 「棚田を都市に住む人の近くに」と大都会での棚田PR活動

（NPO法人夢中塾、毛利良之副理事長）

「NPO法人夢中塾」という大都会の勤労者による団体による棚田地域の支援活動を基礎に、棚田支援の国民的な意識高揚と具体的な支援活動のより広範な展開を仕掛けている。

「棚田はもう孤立していない！」 コーディネーター・千賀裕太郎

けつある。

具体的には、東京丸の内地域での「棚田フェスティバル」の企画を通じて、大都会のサウカーマン・企業経営者が、自らの「棚田意識啓発」に努めている。このフェスティバルはまだ成就していないが、反応は良好で、来夏の開催にむけ強い手ごたえを感じている。

またその一環として「棚田検定」の開設を棚田学会に提案して、この10月から「学士」「ース」を開始させた。この事業は朝日新聞に紹介されるなど順調なスタートを切っており、順次修士「ース博士」「ース」を開設していく予定である。棚田学会による検定問題の作成などを通じて、棚田に関する知識の体系化を促すとともに、多くの市民への棚田に対する情報発信のツールの整備にもなると評価される。

4. 葉っぱビジネスで山間集落の活性化

（株式会社いろどり、西谷吉雄取締役）

「木の葉」がビジネスになると信じられるのは少なかったが、数々の困難を突破して、大きなビジネスモデルに展開した。30年前に、マイナス30度といつも寒い地域で、地域の主要産業であったミカンの木が全滅したのをきっかけに、料亭に「ママのとじての葉っぱ」を納入するビジネスモデルを開拓し、20年後にはその事業による累積売上高20億円を突破した。当初は、葉っぱをお札に変える「狐のだまし」のような事業などとても恥ずかしくてやれない、などとじつは、平均年齢70歳の女性・高齢者（70代軒）が、いまやパソコンまで使いこなして、嬉々として事業に参加している。この効果は、後期高齢者医療費を県内最下位に押し下げたが、まさに「高齢者福祉産業」といづべきだ。

さるには、若者が参入して過疎高齢化の町から「ターン」の町に変化するなど、その効果は計り知れない。この成功の裏には、発案事業運営に携わった、ターン者である横石現社長の並々ならぬ献身的努力があった。今後は、「葉っぱ」の需要を宿屋や菓子業界にまで拡大すること、横石現社長の並々ならぬ献身的努力があつた。今後は、「じぶん」の事業展開の精神や「ノウハウ」を後継者に伝える活動への展開などが課題である。

以上のいずれも先進的な4件の報告に対して、会場から多くの質問や「メント」が寄せられた。

第一報告に対し、棚田の農民団体と商工会との連携のきっかけは何か、また商品化のリスクはどうしたのか、などの質問があった。これに対しては、商工会主要メンバ

ーと棚田農家の個人的友人関係をベースに、4~5年前から徐々に協力関係が形成され、観光客が少なくなりことから新たな展開を求めていた商工業者が、自らスクをとつても、棚田という地域ブランドでの商品化を進めるという提案を行ったとの回答があった。

第二報告に対し、なぜ集落を超えたNPO組織別途作たのか、若者の参加はどうか、などの質問があった。地域の課題が過疎高齢化、森林荒廃、農業生産縮小など、いずれも集落単独では解決できず、かつ行政等からの助成を受け入れる組織的力量が不足するので、より広域でしっかりとしたNPO組織を立ち上げることとした。と回答があり、また活動の主体は60歳以上で、会社勤めが多い若者には活動への参加を無理に勧めることはせず、彼らが50歳から60歳代になつたら、徐々に参加してもらいよう促してやきたい、と回答していた。

第三報告に対する、大都会の市民は本当に棚田地域に関心を寄せているのか、との質問に對して、現在はある種の農アーバンとしてよいので、大都会における棚田PR活動によって棚田地域へのターン者か増える可能性はあると信じており、また企業としても、棚田支援活動は経済的な直接利益は期待できませんが、企業のPR活動として棚田支援に取り組めば、PR効果は大きいと考えていい、と回答していた。

第四報告に対する、葉っぱビジネスで実績を上げた最も重要な要因は何か、といつ質問には、当初は山に自然に生えている樹木の葉を摘んでいたが、その後には傷物が多かつたり大きさや形や色合いでそろわなかつたりして安定した高値が付かなかつたので、樹木を畑に植えて育てるこことによって、手をかけて無農薬で姿形のそろつた美しい葉ものを生産できるようになり、大きな付加価値を認定して獲得できるようになったと答えていた。

以上のような報告と質疑を通して、「棚田はもう孤立していない」ということが確認できたのではないか。地域の商工業者や、非農家を含めた集落を越えた地域有志によるNPO法人、さらにはターン者や都会の市民や企業までもが、棚田地域における課題解決に手を貸すようになってきたことで、棚田地域に從来にはない活力が生まれつつあることが、証明された。

運営としたように見えた棚田サミット10年の歩みが、実は現在着実な上向きの変化をもたらしているといつことを確認できた、とても意義深い分科会であつたと言えよう。

みんなの声

石部の棚田で振って
くれた手作りの旗。これを
40本手描きしたお母さん

高橋マサコさん（静岡県松崎町石部地区在住）

私は石部育ちの、自然大好きバアちゃんです。季節の花を咲かせ、迎える。全国棚田サミットが私たち棚田で働く者の望みでした。村長（注：この別称「赤根田百笑の村」）の指導のもと願いをこめて播いた種は育たず、胸を痛めました。

近づくサミットにはたと思い立ち、旗に一輪のコスモスを描き、区民のあたたかい心を伝えたく、当日を待ち、みなさんを送ることができました。

天辺（てっぺん）から見える富士山も我々を守り育ってくれます。多数参加の皆様のまたのあいでをお待ちしています。



地元の人たちがみんな笑顔で
手や旗を振ってくれた



写真右が4年生の豊嶋学さん、左が同じく4年生の内山晃さん。3人ともスタッフとしても活躍し、見学会では参加者を案内していた。



スタッフのなかに見つけました！

石部の棚田保全活動を支えている
富士常葉大学の学生さんたち

瀧 文康さん（富士常葉大学1年・静岡県静岡市在住）

初めて棚田サミットに参加させて頂きました。多くの人がいろいろな話を聞かせて頂きました。僕自身いい勉強になりました。



写真左は、棚田むすびの会代表の中崎義志晴さん

棚田学会副会長も全国棚田サミットのファンです！？

海老澤 衷さん（早稲田大学教授・東京都国分寺市在住・個人正会員）

篠原農水副大臣のスピーチで、ふるさときやらばんの石塚氏の発想によつて、棚田学会が生まれ、そこで理事を務めたことが披露された。川勝知事の講演では、篠原氏が日程を繰り合わせて出席されたことが紹介され、石部の棚田を桃源郷と讃えた。知事自身、軽井沢の自宅で長く農作業をされたことからすれば、今回のサミットには並々ならぬ関心があったことが伺える。

棚田の上にすばらしい道路と駐車場ができる、団体見学が楽にできるようになった。天気が良くて、富士山と棚田の桃源郷を満喫できた。



2010年9月、
富士常葉大学に着任！
山本早苗さん
(富士常葉大学環境防災学部講師・滋賀県大津市在住)

私は、2010年9月から富士常葉大学に着任し、高木伸先生が長年、学生たちとともにかかわってこられた石部の棚田保全活動に一度お邪魔させていただきました。

今回、全国各地から参加された皆さんと交流でき、また、石部の皆さまの心からのあもてなしを受けることができ、とても楽しい2日間となりました。

これからも石部での活動に私もかかわっていきたいと強く感じました。



2013年、第19回棚田サミット開催地は和歌山県有田川町。和歌山県農業農村整備課からも参加されていました！

中尾 健さん
(和歌山県農業農村整備課課長・和歌山県和歌山市在住)

初めておじやまする西伊豆地方。しつつりとして、落ち着いた街並の松崎町に感じ入りました。熱気あふれる会場のハッピ姿の皆様に、ふるさとへの熱い思いを感じました。

3年後には、和歌山県有田川町で待ちしております。皆様に感動していただけることを期して！



たった1人、個人で参加して
いた女性を見つけました！

金子亜由美さん
(しづおか里地棚田くらぶメンバー・静岡県袋井市在住)

ここ数年、職場の掲示板で気になっていた棚田くらぶの案内。何故か、今年はやってみようと思った勢いで申し込み、さらに棚田サミットの案内を見て、棚田のことはよくわからないのに参加していました。会場の熱気に圧倒されたり、棚田の保全にたずさわる方々のお話をうかがったり、石部の棚田をめぐったり、感動することばかりの2日間でした。これからも歌にあったように棚田に出かけようと思います。



全体交流会で写真右は、株式会社ターニング佐々木詩緒さん。葵食フードコーディネーターさんです

2009年、第15回棚田サミット開催地、新潟県十日町市からも大勢が参加。
代表して

山岸公男さん (棚田農家・新潟県十日町市在住)

第1分科会に参加しました。いつも思うことです、保全活動は大事なことであり、学生、会社、市民等々の協力なしではと思っています。

棚田の中で生きている私たちにとっては、そこで生活をして現金収入を考えなければいけない訳で、ボランティアで保全活動は考えられないことです。棚田を通して理解を深めてもらい、棚田米を、野菜をちょっと高いけれど買ってもらえるような、もっとつっこんだ泥臭い話し合いがされたことがなく、また質問も同様だと思います。それを持みたいと思います。



1995年、第1回棚田サミット開催地、高知県梼原町からの参加。千枚田オーナーからはじまり、千枚田の中に定住し、いまでは保存会の会長になりました！

田村俊夫さん
(神在居千枚田ふるさと会会長・高知県梼原町在住)

志を同じゅうする者どうし、出会いのあるがが、えいろう！
新たな出会いに感謝しちゅうぜよ！

戸別所得補償と第3期中山間地域等 直接支払制度の評価と課題

「一デイナー」
(早稲田大学名誉教授・棚田学会会長)

中島 峰広

首長会議では標題の2つの制度と扱い手確保について議論が行われた。

まず、戸別所得補償制度は民主党が玉にした施策の一つ。当初、2010年度は制度設計に止め、2011年からの実施としていたものが、参議院議員選挙直前に561億円の予算を計上、急速本年度からの実施が決まった選挙対応施策といえる制度である。

この制度は、米戸別所得補償モデル事業と自給率向上対策事業の2本立てになつており、前者は主食用米の作付面積10

a当たり、1万5000円を定額交付し、米価が下落した場合は追加の補填も行つじるもの。後者は自給率向上のために、水田で麦、大豆、新規需要米(Whole crop silage用)などを栽培した場合、10a当たり麦、大豆は3万5000円、新規需要米は8万円を交付するとしている。

しかし、前者では自家飯米・縁故米を生産する分として一律10aの面積を差し引いた分、後者では実需者との契約を前提とした新規需要米の生産としている点に問題がある。棚田地域では自家飯米や縁故米の生産に止まる農家が多く、実需者を見つけるほどの力のある農家も少ないことから有効的な施策とはいえば、むしろ、中山間地域等直接支払制度に集中し、助成金を上乗せした施策の方がよいという意見が多かった。

中山間地域等直接支払制度は2000年に始まつた施策であり、棚田である急傾斜地水田(傾斜20分の1以上の水田)を5年以上継続して耕作すれば、10a当たり通常単価で2万1000円を支給するというもの。2002年以来、その対象面積が約16万haで推移していることからもわかるように、この制度により棚田の耕作放棄に歯止めがかかつた。もし、これがなければ全国の棚田の多く

が姿を消していただろうといわれるほどに評価されている。

2010年度から始まる第3期の新規対策としては、高齢者が途中でリタイアしても最初にその引き受け手を決めておけば、協定の変更が可能などと、小規模・高齢者集落(限界集落)については加算措置を行うこと、耕地がまとまって1ha以上なく分散していても、共同活動を行う道路などにより結ばれ、1ha以上あればよいという団地要件の緩和などは改善された点として評価が高かつた。

しかし、従来集落協定で交付される金額の使途について明確な規定がなかったのに、新規対策では、個人に原則として50%以上配分するとした点に関し議論が集中。集落で全額、あるいは50%以上を留保し、農道の新設、整備にあてるなどして有効活用し、生産意欲の向上に結びつけていた制度を改める必要はないという意見が支配的であった。

最後の扱い手の確保については、棚田オーナー制度、大学生のボランティア活動、企業のCSR活動などは一助にはなつても決定的な解決策にはなりえない。究極の施策として新規就農者や定年帰農者を定着させるために、直接支払の10倍ほどの環境支払制度を創設する必要があるという提案がなされた。

みんなの声

2000年、第6回全国棚田サミットが開催された
福岡県うきは市(旧浮羽町)からも参加!

関 健児さん(うきは夢醉塾・福岡県うきは市在住・個人賛助会員)

早いもので、2000年に私たちが取り組んだ福岡県うきは市(旧浮羽町)・現八女市星野村(旧星野村)との共同開催の第6回全国棚田(千枚田)サミットから、10年の月日が経ちました。

この10年を見たり、実践活動の発表の内容を聞きますと本当に棚田にかける思いが心の中まで伝わってきます。私たち第6回の棚田サミットを開催した者として、これまでの活動で良いのかと考えさせられます。まだできることがいっぱいあるのではないかと考えさせられます。

第16回棚田サミットを開催された静岡県松崎町(石部の棚田)の方々、本当に疲れさまでした。また、楽しい2日間をありがとうございました。

それから、陰で支えてくれた県職の鈴木さんをはじめ、実行委員会の皆さんありがとうございました。



石部の棚田を見たあと、松崎の町並みを歩いた

サミットを終えて

石部地区棚田保全推進委員会会長・高橋周蔵

のべ2200人を越える人が来てくださり、たくさんの方から「すばらしい」と言つていただきました。

ありがとうございました。こんなにも大勢の人をお迎えし、それだけで地域のみなさんも“棚田保全の10年の歩みは間違いではなかった”と感じられたのではないかと思います。

事例発表や第1分科会でも話しましたが、10年前、荒れていたところをみんなで復田したからこそ、当時、行き詰まっていた地域に明日が見えたわけですが、10年経ちますとやはり保全する者たちも高齢化し、70代を越えてきました。70歳前後以上の人は、美しかったころの棚田も知っていますし、復田への経緯やその苦労も知っています。荒らしているのがきれいになると、心から喜べる世代です。

ですから今回、その次の世代、つまり40～50代の人たちに棚田保全の



重要性をどれだけ伝えられたのか、ということが疑問として残りました。棚田サミットをこの町で開催することで、地域全体で棚田保全の意識を高める絶好の機会でした。ですが残念なことに、地域の後継者である40～50代の人たちは、サミットのサポート役に回つていて、知事の基調講演や分科会などを聞けずじまいだったのです。先輩の取り組みや先進事例を聞いて、思いを共有することもできたはずなのです。ですが、2000～3000人がボランティアとして動いていました。もちろんそういうわけにはむずしいものです。ですから今回サミットを終えて、サポート役とはいえ、全国からの大勢のみなさんの熱気が地元にも伝わり、「自分たちには関係ない」ではなく、「自分たちも継がなきや」という思いが芽生えはじめます（談）。

また一方、事例発表でも今後持続させていくことが課題と話しました。その後の分科会で、もう少し深めた議論をしたかったのですが、そこまで進みませんでした。全国のみなさんから、保全の後継者という点において意見をたまわりたかった。現実問題として、若い世代とどう夢を共有していくのか、働く人をどう確保するのか。定住帰農条件を満たすような環境づくりをどうするのか……。都会の人が住みたいと思っても生活ができないままでは、過疎化に歯止めがかからないのが現状です。もっと議論して、具体的な提案や意見が欲しかったと思っています。

小さな集落ほど地域内で夢や思いを同じにしないと棚田保全はむずしいものです。ですから今回サミットを終えて、サポート役とはいえ、全国からの大勢のみなさんの熱気が地元にも伝わり、「自分たちには関係ない」ではなく、「自分たちも継がなきや」という思いが芽生えはじめます（談）。

ベレー帽が似合う棚田農家のお父さん！
鹿児島県からの参加者でした。

藤井道博さん（日本棚田百選入来地区会長・鹿児島県薩摩川内市在住）

参加させていただいて、感動しました。有難うございました。川端康成の小説『伊豆の踊子』で有名な伊豆や天城峠はどんな所か胸を膨らまし期待して、鹿児島県より7人参加し、そのうち3人が棚田の耕作者でした。富士静岡空港で降りて清水港から土肥港に上り、右に海岸、左にお茶畑を見ながら21日は堂ヶ島温泉に泊まり、宿から眺める海岸の美しいこと。22日の朝、遊覧船で天窓洞見物をして会場に入りました。県知事の基調講演の素晴らしいこと。1000人位の参加者がしーんと静まり、熱心に話を聞いていました。さすが、静岡県知事、富士山が日本には沢山ある、たとえば鹿児島には薩摩富士があるとか、駿河湾の深さは日本一だとか、いろいろ宣伝・自慢をされても嫌気もせずに聞き入っていました。

そして、分科会。自分たちは第2分科会へ里山の宝探しへでした。土屋先生は螢の話。螢を養殖し失敗した話など、我々農家にはそんなゆとりはない。若いとき、私は池をつくり、川びなをはなし試してみたが、イノシシに荒らされて失敗した経験がある。福井先生はトンボの話。鹿児島県のいむた池にはベッコウトンボも成育しています。日鷹先生の減農薬で虫の話、草の話。稻垣先生は多面的機能等。自分たち棚田を耕作している者にとっては知り尽くしていることで興味がなかったので、途中で退席し、第3分科会、第4分科会に行き、資料を頂きました。できれば自分は、戸別所得補償とか中山間地域支払制度等の話を聞きたかった。そして交流会。交流会では松崎の町長や農協組合長など偉い立場の方々と話ができ、ほろ酔い気分で楽しい時間を過ごしました。

棚田見学会では、小さな小さな田んぼに稻刈り後があり、ようここまでがんばって耕作していることに感心しました。景観は良く、温泉もあり、都市に近く（東京の人も）、オーナーの人たちが昔を思い、子どもの教育に田植え準備、田植え、収穫と1日のんびり楽しめれば、35,000円でもよいのでしょう。鹿児島では、だいたい1グループ15,000円で参加賞に米1俵、もち米2キロ位プレゼント。もちろん食事付きです。収穫祭では餅までついてご馳走します。静岡県をあげての歓迎。大変有りがたく感謝申し上げます。最後に富士山のそそのから頂上まで見られてとても嬉しかった。

みんなの声

藤井道博さん（日本棚田百選入来地区会長・鹿児島県薩摩川内市在住）



鳥取県で棚田ボランティアを誕生させ、いまも静岡県で棚田保全活動を盛り上げる仕掛け人！

中里良一さん（NPO法人せんがまち棚田俱楽部理事・静岡県菊川市在住）

元気、アイデア、松崎町のみなさまのあもてなしの心をいただきました。「笑顔で楽しく棚田保全活動」をモットーに、静岡大学棚田研究会の学生さんと一緒に、次の年も棚田が維持できるような活動を行っていきたいと思います。

倉沢の棚田では、2011年度の棚田オーナー募集中です。日本で一番アクセスの良い(たぶん)棚田です(インターチェンジ、空港から車で15分)。

詳しくは、<http://www.tanada1504.net/>



今年もサミットに参加！棚田学会員かつ本協議会会員さんです 高木宏明さん（東京都武蔵野市在住・個人賛助会員）

人口8000人の町に1300人の参加者。一体どうなるかと心配でしたが、380人のサポートーや小・中・高校生の協力。地元の御老人まで満面の笑みで、まさに「結」の精神が実り、大成功の集いでした。庄屋は快晴の富士と駿河湾を見る。

石部の棚田でしたが、周蔵さんの放棄田回復の苦労話。篠原孝農林副大臣の百選選定・学会設立・サミット回顧話。川勝知事棚田・里山文明論の熱弁。千賀教授の分科会総括。中島会長の農政解説なども簡潔明瞭でした。棚田巡りでは地元の心づくし、伊勢海老のどぶ汁では2300匹(!?)が炊込まれ、ポン米菓子、本場天草によるトコロ天、オリーブ茶、桜餅など堪能。

都市からのサミット応援スタッフ、
見つけました！

高桑智雄さん

(NPO法人棚田ネットワーク・神奈川県川崎市在住)

棚田ネットワークで働き始めて早5年が経ちましたが、サミットに参加するのは今回がなんと初めて（笑）。こんな大規模なイベントだとは想像していませんでした。これほどの人たちのエネルギーをもし有効に使えたら…、棚田の未来に可能性が持てますね！



写真右は久野大輔さん（NPO棚田ネットワーク）。昨年の十日町市サミットで、「来年は、自分が棚田オーナーにもなっている松崎町でのサミット。何かお手伝いでできれば」と話していた。なんとサミット当日はカメラマンとしても活躍中だった。



上勝町の棚田保全にかかわるみなさん。
写真右から：上勝町、（有）環境とまちづくり
代表澤田俊明さん（個人正会員）、同社
主任研究員野田隆一郎さん、徳島市の株
式会社あいコンサルタント取締役岸村
憲作さん

2011年、第17回棚田サミット開催地、徳島県上勝町の棚田農家。地元での開催実現へ尽力！

谷崎勝祥さん

(樺原の棚田村会長・徳島県上勝町在住・個人正会員)

- 石部の下の方で、手づくりの旗を持ち、歓迎下さったおばあさんたちの姿が印象的でした。
- 分科会での時間が少なかったが、先生方がよくまとめて下さいました。
- 基調講演1時間はマイクの調整も良く、「タネを蒔く人」よろしく楽しく聴けました。
- 現地見学会は、ゆるやかな斜面の坂道は楽しく歩けましたが、2枚3枚にまたがるオーナー田の管理に頭が下がります。
- 伊豆に入ってからの道、2時間強がしんどかったです。
- 第17回は、樺原の棚田村でお待ちしています。

第17回全国棚田(千枚田)サミットは、徳島県上勝町で開催されます。

開催日程：2011年10月28日(金)、29日(土)

テーマ：緑の階段 みんなで守ろう 日本の棚田

ご協力ありがとうございました。

来年度もまた
お会いしましょう

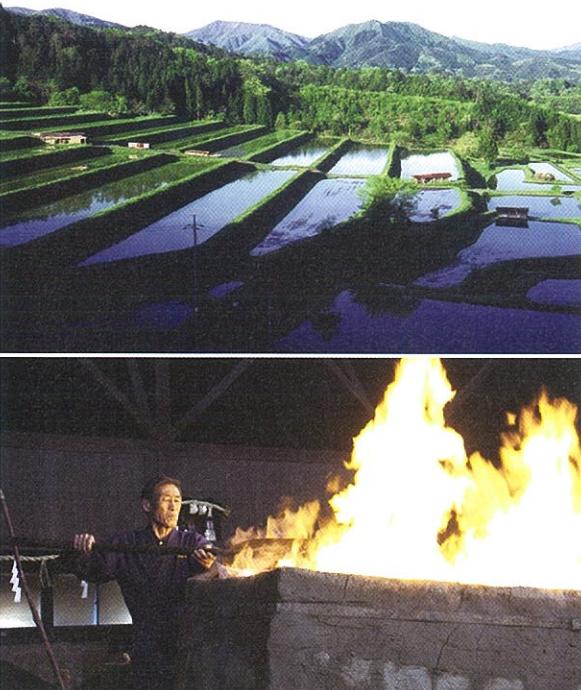
奥出雲町は中国山地のふところに抱かれた、広島県と鳥取県の二県に接する島根県の東南部の玄関口にあります。平成17年に旧仁多町と旧横田町の2町が合併し誕生した町です。一級河川の清流『斐伊川』源流域にある本町は、人口約1万5000人で古事記や日本書記に記され「ヤマタノオロチ退治」や「スサノオノミコト」が降臨したと伝えられる出雲神話発祥の地であり、その神話ゆかりの場所も数多く残っています。古来より「たたら製鉄」と共に栄え、今でも世界で唯一、この伝統の奥義を伝承する「たたら操業」が行われ、日本刀の原料となる「玉鋼(タマハガネ)」を生産し、全国の刀匠のもとへ届けています。

本町は国定公園や県立自然公園など緑あふれる自然環境の豊かな山々に囲まれ、春夏秋冬四季折々の景色を見せ、町を訪れる人を楽しませてくれています。観光地は船通山・吾妻山・鯛ノ巣山・猿政山・鬼の舌震などの景勝地や江戸時代松江藩の鉄師として栄え、国の重要文化財としてその歴史を伝える、絲原記念館 絲原家、可部屋集成館 櫻井家や要害山三沢城跡などの史跡・旧跡スポットが多くあります。また、二重ループ橋としては日本一の奥出雲おろちループ橋、急峻な山岳地帯を列車が進むために造られた非常に珍しいスイッチバック方式による鉄道『JR坂根駅 トロッコ列車』や亀嵩温泉、斐乃上温泉、地元特産の農産物や工芸品等を直売する道の駅や特産市場などの観光地も多く点在しています。主要産業は農業と商工業であり、特に農業は恵まれた豊かな環境と風土や歴史・文化を活かしながら、環境にやさしい農業を推進し「食の安全と安心」にこだわり、「仁多米」「奥出雲和牛」「奥出雲椎茸」など奥出雲ブランド商品の品質向上を目指し、更なるステップアップによる産地づくりの強化に取り組んでいます。



大原新田

おおばらしんでん



奥出雲町ではいまも、たたら操業が続いている



大原新田は中国山地の広島県境に位置する国定公園吾妻山の麓、標高約500mの馬木盆地の中にあります。遠くに多くの雲峰山々を望むことの出来るとても見晴らしの良い棚田です。春は早苗の緑が水田に綺麗に映え、夏は透きとおる様な青い空にそよ風が稻を緩く揺らし、静まりかえた夜はエネルギーの声が棚田いっぱいに響き渡ります。秋は一面黄金色に染った棚田は一面の銀世界へと姿を変えています。棚田での米作りを通して季節を感じ、春夏秋冬いつも

新鮮な景色は昔と変わらない素朴な田舎の原風景そのものです。大きく綺麗に整形されたこの棚田（団地面積4.9ha）は、一見すると区画整理された田んぼのように見えますが、江戸時代後期に当時の優れた土木技術により、人と馬を要して築造されています。古来から先人の手により保全管理され、本地区の歴史と共に生きてきた貴重な棚田です。棚田『大原新田』は、古代にこの地域の主力産業だった『たたら製鉄』と深く関わっています。砂鉄と木炭を原料にたたらを用いた和鉄製鍊法『たたら製鉄』は、不純物の少ない砂鉄を採取するために、砂鉄が含有する真砂土という山肌の土砂を階

段状の水路で流しながら砂鉄だけを分離し沈殿させる、独特の手法（かんな流し）が用いられ、水力で流され堆積した土石を使い、この大原新田の農地やその周りに点在する住居地が生まれています。

一般的な棚田とは異なり、一枚の田面積が大きく、法面は急勾配で一段は高く、石垣がないのがこの棚田の特徴です。これは当時、かんな流しをする際に使用された水路跡に玉石や小石を敷並べ大きな

田を残して

くれた

先人への

感謝を気

持ちを忘

れず、家

族と共に

元気に米

づくりに精を出し、生活の糧とし

ている人々がここにはいます。

『日本の棚田百選』に認定されています。以来、この地は映画『砂の器』の冬景色のロケ地として絶好の撮影ポイントなったこともあり、以来、年々観光客が多く訪れるようになりました。しかし、この棚田の由来をPRする手段が無かつた事から、平成21年度に『中山間ふるさと水と土保全推進事業（棚田基金）』を導入し、都市住民の方への棚田保存啓発を目的とし、『大原新田棚田保全管理委員会』が設立され、棚田案内看板・歩道が整備されています。

（島根県奥出雲町農業振興課
舟木 長）

平成11年7月には、農林水産省『日本の棚田百選』に認定されています。以来、この地は映画『砂の器』の冬景色のロケ地として絶好の撮影ポイントなったこともあり、以来、年々観光客が多く訪れるようになりました。しかし、この棚田の由来をPRする手段が無かつた事から、平成21年度に『中山間ふるさと水と土保全推進事業（棚田基金）』を導入し、都市住民の方への棚田保存啓発を目的とし、『大原新田棚田保全管理委員会』が設立され、棚田案内看板・歩道が整備されています。

全国各地には多くの素晴らしい棚田があると思いますが、是非、素朴で心癒されるこの棚田にお立ち寄りください。今後はイベント等の計画も検討し、皆さんとの交流活動を通じて棚田の保存の大切さや魅力等を紹介していきたいと考えています。お待ちしております。

全国には多くの素晴らしい棚田があると思いますが、是非、素朴で心癒されるこの棚田にお立ち寄りください。今後はイベント等の計画も検討し、皆さんとの交流活動を通じて棚田の保存の大切さや魅力等を紹介していきたいと考えています。お待ちしております。



大原新田では、肥沃な土壤とこの土地特有の昼夜の寒暖差で毎年とも美味しい良質なお米が生産されます。奥出雲町のブランドであるお米『コシヒカリ』は東の「魚沼」、西の「仁多米」と言われる程の逸品であり、献上米にもなっています。また、奥出雲町の地酒である銘酒『棚田五百万石』『佐香錦』の酒米も地元酒造会社との契約栽培により生産しています。

2010年10月に、愛知県名古屋市で生物多様性条約第10回締結国会議が開催されました。

「生物多様性の保全」と「その持続的な利用」を地球規模で考えるこの国際会議は、私たちの小さな田んぼなどのようなかわりがあるのでしょうか。

この会議の中で日本政府は、自然と人間とが対立するのではなく、里山のように人の暮らしが自然とかわることによって維持されていくモデルを「SATOYAMAイニシアティブ」として提案しました。

絶滅危惧種が多く見られたり、豊かな生物多様性を持ちながら消失しようとしている場所は、「ホットスポット」と呼ばれます。全国の棚田の多くはホットスポットと位置付けることができます。豊かな水辺環境である棚田は、多くの生き物の生息地となっています。棚田はまさに「SATOYAMA」のコアとなる場所なのです。ただし、棚



COP10における農林水産省の農地の生物多様性
の展示ブース（写真：市原実）

COP10に向けて—その③

小さな棚田の大きな役割

～COP10が棚田保全にもたらすもの～

静岡県農林技術研究所
上席研究員

稻垣栄洋

人のにぎわいが棚田の生物多様性を高める

人もまた棚田の生き物の一員



田の生き物の多くは周辺環境と行き来して暮らしていますから、棚田だけが保全されれば良いということにはなりません。生き物にとっては、棚田周辺の森林や草地、ため池などの環境が保全されることも必要なのです。もちろん、棚田の保全だけでも大変なのに、周辺の里山環境まで手が回らないことがあるかもしれません。

その土地の歴史や風土の中で育まれた棚田は、それが個性ある固有の自然を持つています。そのため、棚田が違えば、そこに見られる生きものの種類も変わ

ります。理由の1つは、条件の異なる田んぼや畦畔など、さまざまな環境条件があることです。その環境が複雑で多様であればあるほど、そこには暮らす生物の種類は増えます。しかし、それは単に棚田の中だけの話ではありません。

棚田の生物多様性が高い理由の2つ目は、条件の異なる田んぼや畦畔など、さまざまな環境条件があることです。その環境が複雑で多様であればあるほど、そこには、「生き物のにぎわい」という言葉で表現されます。生物多様性は、生物の多様度が増える傾向があります。しかし、それは単に草刈りをした場所ほど、植物の多様度が増える傾向が見られました。生物多様性が、様々な人々が棚田に関わることが、棚田の生物多

ります。つまり生物多様性を保全していく上では、特別な棚田が1つあれば良いということではなく、あらゆる棚田が保全されることが大切なのです。

もっとも、多様性を決定づけるのは、自然条件だけではありません。棚田の自然是稲作という人間の営みによって維持されています。最近ではオーナーやボランティアなどさまざまな市民が棚田にかかりますが、私たちの調査では、農家だけでなく、熟練度ややり方が不渝いな多くの人たちであります。しかし、それは単に棚田の中だけの話ではありません。

Topics

西武池袋本店にて

「心のふるさと棚田・里山展」を開催!

株式会社そごう・西販売促進部 宣伝企画担当

西武池袋本店大催事場(だいさ
いじょう)にて、2010年8月4日(水)より8月8日(日)まで、夏休み企画として「心のふるさと棚田・里山展」を開催いたしました。

会場には、文化庁が重要文化的景観に指定した佐賀県唐津市の「蕨野の棚田」など国内の棚田から世界遺産に登録されたフィリピン・コルディリエーラの棚田など海外の棚田まで迫力ある大型写真パネルで紹介し、また環境保全をテーマにしたミュージカルや、新聞やチラシを材料にしたおがみ

教室、ホタル観賞など楽しみながら自然や生き物の大切さを学んでいたぐイベントも実施いたしました。

夏休みもあり、日々3世代にわたりのファミリーが多く来店され、ご年配の方は、パネルの前で郷里を懐かしまれ、今回協力を頂いた棚田学会会員の方々が解説をする田んぼの神様や地域ごとの風習等に大変興味を持たれていらっしゃいました。お子様や学生の皆様には、自由研究のテーマ探しやふるさとの疑似体験を親子で楽しんでいらっしゃいました。

サミット開催には全国の会員の皆様、また、ご来賓、一般参加者、国員関係者と多くの方に多大なご支援をいただきました。誠にありがとうございました。

1日目は棚田保全の取組み、また、地域農業の高齢化や後継者、担い手不足など、棚田が抱える問題について活発な意見交換がされ、夜の全体交流会では、開催地松崎町の地元料理と伝統芸能を堪能し、参加者同志の交流を深めました。

2日目の棚田見学会は、駿河湾を眼下に富士山や南アルプスを望む素晴らしい自然景観を持つ石部の棚田で開催され、地元松崎町のみなさんの心のこもったおもてなし

が大変印象的でした。棚田テーマソングを歌った小学生の歌や踊りもすばらしかったです。改めて、棚田保全の意義や必要性を再確認し、この棚田を次の世代へと引き継いでいくこうとする私達の思いが

全国に向け発信できたと思います。

都内百貨店で自然を感じる

事務局ニュース

事務局、新潟県十日町市からのお知らせコーナーです。

サミット開催にご尽力頂きました松崎町長をはじめ、実行委員会の皆様、地元の皆様、後援を頂きました関係諸団体各位に対しまして、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

さて、サミット開催に先立ち、22日の午前中に理事会及び総会が開かれました。未定であった第18回のサミット開催地について、サミット開催地選定委員会中島理事長により、熊本県山都町で開催されることが正式に決定されました。大変、うれしいニュースです。

また、会員募集の件ですが、昨年に引き続き、棚田百選に選定されている市町村へ入会依頼を行ない、新規会員の獲得に努力しています。

来年のサミットは徳島県上勝町で開催されます。開催に向けて着々と準備を進めていただいている新規会員の獲得に努力しています。会員皆様の大勢のご参加をお願いします。

編集後記

今回のサミットは、連絡協議会発足以来、棚田保全がある一つの域に達したように感じられたサミットでした。石部の棚田保全と同様に、サミットのスタッフには地元だけではなく、県職員、学生さん、そして都市からの応援スタッフもいたのです。誤解を恐れずにいえば、10数年前、棚田地域はある時代に取り残されてきたかのようにひっそりと、じっと苦難を耐えているかのようでした。それがいま、農村振興の先頭に立ち、外部の力を取り入れ、生き直そうとしている……。宮崎県日南市で生まれた「棚田へ行こう!」の歌がここでも歌い継がれています。閉会式で聴いていると、大勢の人たちの思いが何年も何年も積み重なって、ようやくここへ辿り着いたのだと思いがめぐり、涙がほろほろ……。みなさんのご苦労が形になっているのが実感できました。わたしもみなさんとともに、できるところを1つずつでもしていきたいと思います。

石井里津子

会員募集集中

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織

全国棚田(千枚田)連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局

新潟県十日町市産業観光部農林課

〒948-8501 新潟県十日町市千歳町3丁目3番地

T E L : 025-757-3111

F A X : 025-752-4635

協議会 HP:<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

新しく会員になったみなさま

<自治体正会員> 新潟県柏崎市

<団体正会員> NPO法人恵那市坂折棚田保存会(岐阜県)

<個人正会員> 松下 和照(徳島県)

向笠 功一(神奈川県)

海老澤 裕(東京都)

<個人賛助会員> 村越 康彦(宮城県)

青山 淳二(京都府)



棚田学会主催の棚田検定がスタートしました。

受検料の一部は棚田学会を通じて、棚田保全活動に寄与されます。

詳しくは…<http://www.tanadagakkai.com>

「静岡県棚田等十選」紹介

*石部の棚田は、p2にて紹介。ここではほかの9カ所を紹介します。

久留女木の棚田

浜松市北区引佐町西久留女木、東久留女木



浜松市中心市街地から1時間程度の静かな山あいの棚田。棚田米は「久留女木の棚田育ち」の名称で販売されている。地元の保全組織を中心に企業や地元小学校などにより保全活動が行なわれている。

栽培作物:水稻、花木

瀬尻の段々茶園

浜松市天竜区龍山町瀬尻



山間の急傾斜地(1/1.5)に石積みによって築かれた段々の茶園。生産されたお茶は、天竜茶として販売されている。龍山小学校の児童と茶摘み等を通じ交流が図られている。

栽培作物:茶

柚野の棚田群

富士宮市柚野



旧芝川町柚野の、上稻子、鳥並、西山、猫沢地区にまたがる棚田群。農業者の高齢化と後継者不足から管理不足の水田が増えている。柚野の棚田では、靈峰富士が田面に映し出される「逆富士」が楽しめる。

栽培作物:水稻、花木

大栗安の棚田

浜松市天竜区大栗安



標高425mに位置し、周囲の山々と調和した景観が美しい棚田。棚田でとれた米は「大栗安棚田米」の名称で販売されている。地元の保全組織「大栗安棚田俱楽部」を中心に企業やボランティア等も加わり保全活動が行われている。

栽培作物:水稻、茶

倉沢の棚田

菊川市上倉沢



JR東海道線菊川・金谷駅間に位置し、車窓からも眺められる全国的に珍しい棚田。地元では畦畔が田面を縁取る様を形容し「せんがまち」と呼ぶ。「NPO法人せんがまち棚田俱楽部」が棚田オーナー制度に取り組んでいる。

栽培作物:水稻、梅、栗

筏場のわさび田

伊豆市筏場



伊豆地域の「わさび田」は、天城山系の冷涼で豊富な湧き水のある渓流沿いに「畳石式」と呼ばれる造成方法で築かれた棚田。清冽で年間を通して一定の水温で栽培されるわさびは、全国的に珍重されている。

栽培作物:わさび

兎荷の棚田

浜松市北区引佐町兎荷



浜松市北区引佐町の山並みと調和した美しい棚田であるが、近年鳥獣被害が多発し、花木類やミカンなどの栽培に移行している。現在水稻栽培はほとんど行われていない。

栽培作物:ミカン、花木

俵沢のつづら折り茶園

静岡市葵区俵沢



つづら折りの道路と調和した石積みの美しい段々の茶園。茶価低迷、農業者の高齢化などから放棄茶園が増加する中、近年隣接する俵沢地区と合同で耕作放棄解消事業への取り組みが行われ、景観保全に努めている。

栽培作物:茶

入間の段々畑

南伊豆町入間



アガパンサスが植えられた段々畑で、上から駿河湾を眺められる。昭和30年代から盛んに栽培が行われていたが、高齢化と後継者不足により、徐々に栽培面積が減少している。

栽培作物:アガパンサス